

聴く

新潟いのちの電話だより

2017.6

No.133



相談電話

(025) 288-4343

上 越 (025) 522-4343

長 岡 (0258) 39-4343

新発田 (0254) 20-4343

村 上 (0254) 53-4343

インターネット相談

<https://www.inochinodenwa-net.jp>

息子の異変

高橋竹育

1999年の春、息子 史佳は、大阪本社に配属になった途端、電話に出ても不機嫌な声で素っ気なくなり、急にどうしたのかと心配になりました。ある日「僕、生きてても価値ないね」電話の向こうで涙ぐんでいる様子。すぐさま大阪に飛んで行きました。

久しぶりに会う息子は精気なく、笑顔が消えていました。突然の出来事に解決策も見つからず、私だけ一旦戻ってきました。

電話がつながらないと悪い事ばかり考えて、毎晩眠れない日が続き、とめどもなく涙が流れます。そして息子は、会社の心療内科で重度の「うつ病」と診断され、病欠で帰省してきました。新潟に戻ると元気を取り戻したものの、大阪に帰るとまた元気をなくしていきました。

同じ年、私の師匠が急死し、ショックから立ち直らない時に息子の病気、そして私の右肩が上がらなくなり、三味線がよく弾けなくなりました。それでも休むこともせず、必死でした。指が駒にすれて血がにじんでも、何とか弾き通しました。最大のピンチの中、私が青森へもう一度勉強に出かけたのもこの年でした。

半年後、息子から「SOS」の電話が。私はなんとしても新潟に戻るように説得しました。「何もかも精算してゼロになって戻ってきなさい」必死の思いでした。

戻ってくるまでは、息子を信じて待つしかありませんでした。辞める決心をして、戻ってきたのが1999年12月のことです。もう人生が終わったかのように、肩を落としてホームから降りてきた息子の姿を忘れることが出来ません。

息子がここで終わることは絶対にならないんだと信じるしかありませんでした。この先息子を立ち直らせるには何があるのかと、毎日毎日その事で頭がいっぱいでした。この時、改めて「家族の支え」が一番大切なことに気づいたのです。

高橋竹育(たかはし ちくいく)

三味線演奏家、新潟高橋竹山会会主。

会社員を経て三味線演奏家となった、息子史佳さんの師匠、そして母でもある。竹山流三味線一筋に、精力的に演奏活動を行う。

史佳さんに続き、4回にわたってご寄稿いただきます。

ある日の相談室より

午前9時、今日はインターネット相談の日だ。12時までの予定で、本日担当の3人が集まった。パソコンを取り出し画面を開く。ボタンをクリックして相談文を読む。

20代の女性、R県から、相談回数は7回だ。1回目という相談者も多いが、100回を超える方もいる。

「疲れました」から始まる。中学受験に追われ、第一志望に受かり、エスカレーターで高校に上がったけれど、教師と生徒からのいじめに遭い、うつになり中退。自分を脱落者と言い自己嫌悪になるという。その後もレイプ、自殺未遂、発達障害がわかる。死にたい、生きていたくないと訴える。

相談文を読んだら「返信文作成のためのシート」に沿って返信文を考える。書き始める前に3人で意見交換する。相談者が求めていること、共感したいところ、相談文の理解の仕方などを話し合っていく。

さあ、書き始めよう。

小学生の時から精一杯生きてきたことを^{ねざら}労う。大変な目に遭い、自殺未遂もあった。そのフラッシュバックはどんなにかきついことだろうと共感する。そして、ご両親の前で泣くことができたこと、私たちも応援していることを伝え、寄り添う。よろしければまたいつでもメールくださいと結んだ。

返信文が出来上がるとまた、3人で話し合う。共感しているか、押しつけになっていないか、スーパーバイザーの先生がいるときは、一緒に確認していただく。今日は3人で意見交換して修正した文を返信した。

どんな思いで返信を待っているだろうか。この返信文は、その思いに応えているだろうか、何回も試行錯誤し、他の方の意見も聴いて十分吟味した返信文のはずだが、不安になる。ただ、今できることは精一杯やった。あっという間の3時間だった。パソコンを片付けて部屋のカギを閉めた。

（内容は、いのちの電話インターネット相談を基に構成し直したものです）

自分の内に触れること

布施直美

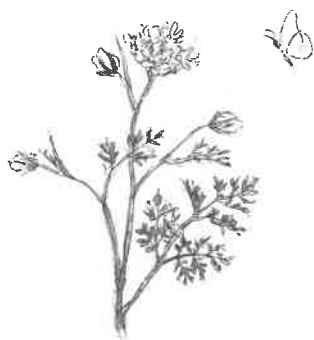
普段なら、できることからさっさと仕事を片づけてしまう私ですが、「聴くことの意義や心に関することであつたら、どんなことでも書いてもらって結構ですよ」とこの原稿を依頼されて以来、常に気になっていながら、長い間、この“心”に関するテーマに向かえず滞っていました。

何を書こうかなあ〜と過去のこと、自分のこと、あれやこれやと考えていると、様々な想いや記憶が出てきます。自分の内側に触れたくないため、今、やらなくてもよい仕事を見つけては片づけ、しまいには余計なことまでしていたり…みなさんも、似たような経験はないでしょうか。そう思うと、面接室や電話の向こうで自身と向きあっている人達がいかにエネルギーを使い、大変なことをしているのかと改めて考えさせられます。

先日、大学の学生相談で、子供の頃から目標に向かって受験や部活にひたすら走り続けてきたという新入生が「私、うつ病になったようです」と相談ルームに飛び込んできました。実際、話を聴いていくと“うつ病になった”という意味は、大学に入り少し余裕ができ、立ち止まってみたら、新しい生活の中で様々なことを感じ考えたりするようになった、ということでした。

人が何かの真っ只中にいる時、内側に目を向けることは難しく、それぞれのタイミングがあるように思います。私にとっては、この原稿書きの時間が自分の内に触れる、立ち止まる時間になりそうです。

(臨床心理士)



毎月10日(午前8時より翌日午前8時まで)は
フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」が実施されています。
電話番号 0120-783-556

お知らせ

第35期 電話相談員養成講座開講

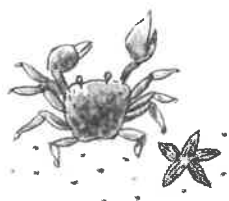
4月27日、2017年度の養成講座が開講しました。17名の受講者が、1年間、電話相談に関する学習を重ねていきます。無事に修了することを願っています。来年度の養成講座の募集は12月となります。今後もご支援をお願いいたします。

チャリティーバザー (新潟いのちの電話後援会主催)

日時 9月24日(日)11時から

会場 新潟市総合福祉会館

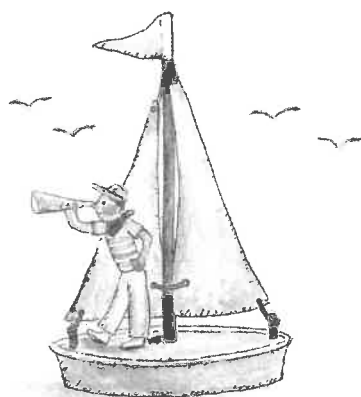
バザーで販売する物品のご寄付を、8月から受け付けます。今年もご協力をお願いいたします。新潟市内の方は、ご連絡をいただければ受け取りにうかがいます。



会費納入のお願い

毎年6月に、会費納入のお願いをしています。

いただいた会費は、相談員の研修費、センターの維持費など、いのちの電話の活動に大切にに使わせていただきます。ご協力、ご支援をお願い申し上げます。



今回からカットが新しくなりました。
引きつづき、お楽しみください。

2017年6月30日発行

社会福祉法人 新潟いのちの電話

〒950-0994 新潟市中央区上所2-2-3 新潟ユニゾンプラザ ハート館
事務局 TEL (025) 280-5677 FAX (025) 280-5677
ホームページアドレス <http://www.ni-denwa.jp>

6月の絵手紙



Sakurai Kouji